

## 愛新覺羅恒煦先生と契丹大字『蕭孝忠墓誌』

### Aisin Gioro Hengxu and the “Epitaph of Xiao Xiaozhong” in the Khitai Large Scripts

Aisin Gioro Hengxu was a famous scholar of the Jurchen and the Khitai scripts. In 1957, he studied the “Epitaph of Xiao Xiaozhong”, recognized the scripts inscribed on the epitaph as the Khitai large scripts in his “Preliminary Decipherment of the Epitaph Found in Xigushan, Jinxi”, *Acta Archaeologica Sinica* 1957.2. In 1962, he more deeply confirmed distinction and characteristics of the Khitai large and small scripts in his “From the Khitai Large and Small Scripts to the Jurchen Large and Small Scripts”, *Journal of Inner Mongolia University* 1962.2. This chapter attempts to re-decipher the “Epitaph of Xiao Xiaozhong” in which Aisin Gioro Hengxu recognized the Khitai large scripts for the first time, and to memorize his achievements in this field.

今年、愛新覺羅恒煦（金光平）先生の逝去40周年の忌辰にあたり、折しも契丹大字研究の進展は画期的な段階にある。筆者は、先生の研究業績を継承し、2005年に『契丹大字研究』（東亜歴史文化研究会）を著した。1957年に先生が初めて契丹大字を定義的に認定してより半世紀を経て契丹大字の解読が達成されたのである。この成果こそ先生の忌辰に献げるにもっとも相応しい。

契丹文字には、女真文字と同じようにそれぞれ「大字」と「小字」と二種類の文字がある。しかしながらどれが大字でどれが小字かといった問題は、前世紀30年代に契丹文字が初めて世の中に姿を現した頃から、長期にわたって諸説紛紛とし、是非が決めがたくなっていた。愛新覺羅恒煦先生は、中国の名高い女真文字・契丹文字の研究家である。1957年に『蕭孝忠墓誌』（圖56）を研究し、「錦西西孤山契丹文墓誌試釈」（『考古学報』1957年第2期）において、墓誌に刻されている文字は契丹大字であると認定した。1962年に、先生は論文「從契丹大小字到女真大小字」（『内蒙古大学学报』1962年第2期）において、契丹大小字の区別とそれぞれの特徴をさらに一層深く論証した。今日では、先生の契丹大字に対する論断はすでに学界に公認されている正確な結論となっている。

ここで、契丹大字研究にあたって先駆的意義をもつ論文「錦西西孤山契丹文墓誌試釈」の要点をまとめると、次の如くである。

(1) 契丹字には、大字と小字との二種類があり、大字の製造及び頒布は遼太祖神冊五年(920)にあり、隸書漢字の筆畫を増減することによって製造された。小字に関しては、頒布年月が記録されておらず、ただ遼太祖のときに「回鶻使至、迭刺習其言與書、因製契丹小字」とあり、時間的には、大字製造以後にあたるはずである。現存する二種類の契丹字につき、慶陵石刻文字は契丹大字で、錦西石刻文字は契丹小字であると一般に論ぜられているが、問題がある。慶陵石刻契丹字には、独体字もあり、複合字もある。複合字は、二個ないし七個の字を複合して組み合わせるものである。ここから見れば、契丹語は多音節言語で、単語ごとの音節数の相違が文字に表現される際に、複合字中の字数を決定することがわかる。錦西石刻契丹字は、慶陵石刻契丹字とちよ